

## ヘーゲル「世界史の哲学」講義の最新の資料状況について

|       |                                                                                                   |
|-------|---------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2018-01-15<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 山崎, 純<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.14945/00024387">https://doi.org/10.14945/00024387</a>                 |

# ヘーゲル「世界史の哲学」講義の最新の資料状況について

山 崎 純

## 一 はじめに

近年の国際政治状況の激変や戦後五十年という節目を経て、現在、歴史や歴史哲学についての関心が高まってきている。歴史哲学というと、いつも悪役として引き合いに出されるのがヘーゲルの歴史哲学である。「絶対精神という神がかったものが歴史の背後から糸を引いていて、個々の人間はその操り人形にすぎない」。「終わるはずのない歴史を十九世紀プロイセンのなかに終わらせた」等々、多くの非難が繰り返されてきた。しかし今日、これらの解釈や批判がはたして妥当なのかということが資料面から問われ始めている。これまで「ヘーゲルの歴史哲学」と言えば、たいてい、弟子のガンスが編集した『ヘーゲル 歴史哲学講義』初版（一八三七年）を息子のカール・ヘーゲルが改訂した第二版（一八四〇年）を指していた。このテキストにいま重大な疑義が出されている。ヘーゲル歴史哲学をめぐる常識、人口に膾炙した非難は、ヘーゲル自身の講義というよりは、ガンスとカールの編集にもとづいて作られた誤ったイメージではないか、ということが問

題にされるに至った。<sup>①</sup> われわれはもはや現行版のみでヘーゲルの歴史哲学を語ることが許されなくなった。五回の年度に開講された「世界史の哲学」講義を新しい資料状況にもとづいて再構成しつつ、講義の実像に迫らなければならない。その際、共通の資料的狀況を確認しておく必要がある。本稿では刊行されたばかりのテキストや最近発見されたばかりの筆記録など、最新の資料状況について報告したい。

資料には大きく分けて、ヘーゲル自筆の草稿と聴講生による筆記録とがある。まず、自筆の草稿について(二)、次に、聴講生による筆記録について(三)見ていきたい。

## 二 ヘーゲル自筆の講義草稿

「世界史の哲学」序論の草稿が今もベルリン州立プロイセン文化財図書館に所蔵されている。筆者も閲覧の機会を得たが、保存状態はきわめて良く、きれいな字で書かれた清書稿に近いものである。これはラッソンによって一九一七年に初めて編集刊行された。ラッソンはガンス版およびカール版の信憑性に疑問を抱き、ヘーゲル自筆草稿の刊行が重要だと考えた。ヘーゲルの草稿に見られるのに両版にまったく採用されていない記述があること。対応する記述がある場合でも、自筆草稿に見られるヘーゲルのもとの言い回しや、より正確な哲学的な定式化の方が優先されるべきだ。これがラッソンが自筆草稿を編集した理由であった(LI, VII)。ところが彼のやり方はいつものように中途半端であった。彼はヘーゲル自筆の部分を活字を変えて読者に分かるようにしたが、草稿そのものを独立して編集しなかった。草稿と草稿の間に聴講生の筆記録の記述を、さらにおそらくは旧版の記述をも挿入してテキストを合成した。したがって、この合成されたテキストを連続して読み進んでいく場合、草稿の思考そのものは他の叙述によって攪乱されてしまう。このような合成を行

わずに草稿そのものを編集したものがようやく一九九五年に刊行された。それが、イエシユケによって編集されたテキストで、全集第18巻に収録されている。彼の「編者報告」(GW. 377-407)に基づいて、この草稿の成立の事情と性格について以下に述べてみたい。

序論の草稿は二種類ある。一八二二〜二八年のものと、一八三〇年のものである。

(1) 一八二二〜二八年草稿(GW. 121-137)

この草稿の1頁はガンスがヘーゲルの遺稿として一八三八年七月三日にプロイセン文化財図書館に収めた。1a、1b頁はたぶんガンスの手から他人にわたり、どういう経過を経たかは分からないが、スイスのチューリッヒで個人の所有となっていた。そのためホフマイスターは彼の版でこれを「チューリッヒ草稿」(Hof.X)と呼んでいた。近年やっとそこからベルリンのプロイセン文化財図書館に移管された。2、3頁もガンスから誰かの手に渡って、途中の経過は分からないが肉筆古籍商の所有を経てマールバッハにあるシラー記念館ドイツ文学文庫に所蔵されるに至った。この三つがもとは一つの連続した草稿だった。

冒頭1頁の欄外に一八二二年十月三十一日と一八二八年十月三十日という二つの日付がある。これをそのまま受け取れば、一回目の一八二二／二三冬学期から四回目の二八／二九冬学期まで使われ続けた講義草稿ということになる。ところが、話はそう簡単ではない。この草稿は歴史叙述の三種類の様式について論じているが、二四年、二六年には序論でこれを主題化しなかったことが現存する筆記録から分かっている。理由は分からないが、ヘーゲルは二八年の講義で、先行する二四、二六年には主題化しなかったこのテーマに立ち返った。そのとき二二年に用いた古い草稿を書き改めた。「一八二二年十月三十一日」はこの学期の開講日であるが、この日付を古い草稿(このものの草稿はおそらく、序論から近代まで

の講義の全体を含んでいたと思われる)から新しい草稿に書き写した。古い草稿の序論部分はヘーゲルの習慣からしておそらく廃棄されたと思われる。したがって現存する草稿は二八年に書かれたものである。「十月三十日」は学期開講の日付であるが、草稿の執筆開始は学期の直前、おそらく九月ないしは十月と推測される。欄外の夥しい書き込みは序論を講じている間に直接書き入れたものであろう。二八年に序論が教室でどう講義されたかは、この学期の筆記録が発見されていないため分からない。歴史叙述の三様式を講じた二年の筆記録と比較して、筆記録にはこの草稿にない記述も見られるが、それは二年の草稿を離れて教室で即興で敷衍した部分か、あるいは二年の草稿にもあったが、これを書き改めるときに新しい草稿に採用されなかった部分であろう。現行版(カール版)は、二年と二八年にのみ講じられた歴史叙述の三様式についての叙述と、それを扱わず異なる構想で講じられた最終学期の序論を合成しており、この点でも問題がある。

## (2) 一八三〇年草稿(GW. 138-207)

「世界史の哲学」講義の最後となった三〇／三一年冬学期には特殊な事情がある。この学期の講義予告では「世界史の哲学」全体ではなく、その「第一部」(序論)のみを講じることになっていたからである(Br. 4/1, 118, 124)。息子カールは「後の講義になるに従って、哲学的な総論が次第に減って、歴史的な素材が多くなり、全体がポピュラーになってくる」(K. 17上16)と述べているが、実は逆だった。ヘーゲルはこの学期に歴史を哲学的にどうとらえるべきかを根本から考えようと決意して、二二／二八年草稿とはまったく別に新しい草稿を書き始めた。それがこの草稿である。それゆえ、これには歴史についての哲学的総論をヘーゲルが最後に自らの手で書き記したものであるという重みがある。

この草稿は基本的には未完であるが、入念に推敲されていることから、おそらく歴史理論を扱った『歴史哲学』の刊行の準備であつたと思われる。執筆時期は夏学期が終わった九月以降であり、具体的な形が整ってきたのは十月に入ってから

らと思われる。

(3) 「世界史の哲学」の断片(GW. 208-210)

この断片は七月革命勃発直後ガンスが激動のバリから市内の最新情報をヘーゲルに知らせた手紙(一八三〇年八月五日付)の裏に、「世界史の哲学」の構想をメモしたものである。この手紙はもしも官憲の目に触れた場合、政治的な危険を伴うものであったためか、受信者を示す呼びかけが初めからない。発信者「ガンス」の署名は予め意図的にちぎられた上で、裏面のメモが書かれている。手紙が届いた時期からして、三〇年草稿の準備の流れのなかで書かれたものであろう。内容からして、自由が世界に実現していく手段を論じた草稿58b―59a頁の準備草稿であらう。斜線による抹消という処理済のマークがあるため、他の紙片に書き移された。ガンスの手紙の日付は八月五日であるが、夏学期が八月末まで続いていたため、これが終わった九月にこの断片は書かれたものと思われる。

(4) 「C 世界史の歩み」についての断片(GW. 211-214)

この断片はヘーゲルからフリードリッヒ・ヴィルケンへの手紙(一八二九年十一月二十七日付)の裏面に「世界史の歩み」についての章編成の構想を練ったものである。草稿の成熟した定式化にくらべて未熟であるため、三〇年九、十月頃の初期段階の準備草稿であらう。

(5) 「東洋の歴史」についての断片(GW. 221-227)

この断片はラッソンが彼の第三版(一九三〇年)に初めて収録したことによって伝えられた。ラッソンはこれが内容的

には本来は東洋世界の歴史の巻（ラッソン版第二巻四一七または四四六頁）に入るべきであるが、これを序論の巻に編入した。その理由として、第二巻がヘーゲル自筆の文章をまったく含まないためヘーゲルの筆による言葉づかいが当該の箇所にもく適合しないからだ、と述べている。しかし本当の理由は一九三〇年には序論の巻の改訂版は出たが、「東洋の世界」の巻の改訂版を出せなかったことによる。ホフマイスターがこの断片を序論の巻から東洋世界の巻の本来の位置に移す決断をして、序論の巻からこれを除いた。しかし彼は本論の編集を結局果たせなかったため、ホフマイスター版からの断片は消えた。ホフマイスターがこの断片の現物を実際に手にしていたか否かは不明である。いずれにしても現在これは伝えられておらず、ラッソン版の第三版によってしか知りえない。

内容は一八二二／二三年度の講義のものであり、フェニキア人についての記述が中断して、エジプトの歴史記述が新たに始まっている。

### 三 聴講生による筆記録

ヘーゲルの「世界史の哲学」を聴講した学生による筆記録は十九現存している。ガンスとカールの編者序文によれば、これ以外にも、シュルツェ、ヴェルダー、ホトーの別の年度の筆記録、ラッソンの編者報告によれば、ケーラーの二四／二五年のものがあつて、彼らは編集に利用したようであるが、これらは発見されていない。筆記録の状態全般についてはヘスベが報告している。<sup>②</sup> この報告を参考にしつつ、その後に関刊された全集版(GW, Bd.18)および新版（講義録シリーズ第12巻）の編者報告、さらに、一九九六年九月に開催された「世界史の哲学」講義をめぐる国際シンポジウムでの報告、<sup>③</sup>そして筆者独自の資料調査をふまえて、現存する十九の筆記録について、開講年度ごとに述べていきたい。カッコ内は筆

記録の略号を示す。

一八二二／二三

(1) グリースハイム (Gustav von Griesheim) (Gr) —— ベルリン州立プロイセン文化財図書館蔵 (請求番号 MS. GERM. QU. 550. 551)。第一冊三七九頁、第二冊三一五頁、総計六九四頁。共同作業によってきわめて入念に仕上げられ、非常に読みやすいきれいな字で書かれた詳細な清書稿。ただし、哲学的に理解困難な若干の箇所、グリースハイムはヘーゲルの詳述の深い意味を期待通りに再現しているわけではない。ホフマイスターが編集に利用した。ツィーシェのカタログに抜粋が載っている (Z. 252-255)。ペゲラーによるトランスクリプトがある。

(2) ホトー (Heinrich Gustav Hotho) (Ho) —— ソルボンヌ図書館ヴィクトール・クーザン遺稿文庫蔵。教室での速記録であるため、略字も多く必ずしも理解しやすいわけではない。授業の初めはきれいな字だが、時間がたつとともに手が疲れてきて読みにくい字になる。そのため、どこから新しい授業が始まったかがかなり正確に分かる。ホトーは哲学的に重要でないところも丹念に再現しており、ヘーゲルの言葉通りに忠実に記録しようと努力したことがうかがわれる。グリースハイムの筆記録よりも包括的である。これに比べるとグリースハイムのは要約的である。しかし、両者にはかなりの一致が見られる。

(3) ケーラー (Friedrich Carl Hermann Victor von Kehler) (Ke) —— ベルリン州立プロイセン文化財図書館蔵。二三枚の四つ折り紙からなり、講義期間の途中までの記録。非常に急いで書かれている。ホフマイスターが編集に利用した。

新版 (G. W. F. Hegel, *Vorlesungen über die Philosophie der Weltgeschichte*. Hrsg. von K. H. Ilting, K. Brehmer, u. H. N. Seelmann. Hamburg 1996) の編者は以上の三者の間に驚くほどの一致が見られると判断して、この三つを合成してテキストを編んだ。

(4) ハーゲンバッハ (Rudolf Hagenbach) (Ha)——バーゼル大学図書館蔵。両面に細かい字でびっしりと書かれた六八枚の清書稿。新版編者はこの筆記録の存在を編集後に初めて知ったため、編集に利用できなかった。

一八二四／二五年

(5) コレヴァン (Jules Correvon) (Co)——二七一頁。一八二四年十月二十八日開講の日付に始まり、二月中旬までの講義日の日付が入っている。非常に急いで書かれ、多くの抹消箇所がある。一人の手で書かれたもの。グロースマンがトランスクリプトを作成している。

(6) ケーラー (Ke<sub>2</sub>)——二七六頁からなる急いで書かれた筆記録で、解読に苦勞を要する。ホフマイスターが編集に利用した。

(7) ドーヴ (von Dove) (Do)——近年発見された筆記録。フィーヴェックが編集集中。

一八二六／二七年

(8) エールトマン(Johann Eduard Erdmann)(Er)——初めはきちんと書かれているが、途中から次第に粗略になる。この筆記録は実際にエールトマン自身の筆によつて仕上げられたもので、単に他人のものを買ったのではないということは、彼の手紙の筆跡との比較からも分かつたことである。

(9) フーベ(Joseph Hube)(Hu)——それぞれ八頁ある六二帖からなり、二冊に綴じられている。第一分冊は一二七頁あり、「東洋の世界」までで終わる。第二分冊は「ギリシャ・ローマの世界」から始まり、一二三頁ある。行の上に多くの追記があり、初めの文章構成を修正したり、思想をより厳密に規定しようとした跡がある。それらの追記は最初の文字より薄いインクで書かれているが、同一の筆跡である。同じ思想が別の言葉で繰り返されているところで、文章の全体ないしは一部がときに抹消されている。それゆえ、単に書き写したものではなく、書きながら、あるいは修正しながら、思想を定式化したものである。ペゲラーのトランスクリプトがある。

フーベ(1804-1891)はポーランド人であるから、この筆記録はポーランドにおけるヘーゲル哲学の受容史にとつても重要な意義がある。筆記録は彼の兄、ロームアルト・フェルディナント(Romuald J. Ferdynand, 1803-1890)の文庫に保存されていた。フーベ兄弟はともに法律家で、兄は一八二五年にサヴィーニとヘーゲルのもとで、弟は一八二四年から二八年までヘーゲルのもとで、ベルリンに学んだ。兄のロームアルトはのちにワルシアワとペテルスベルクで教授となり、一八五六年から六一年までロシア系ポーランド人のための法律委員会の代表を務めた。彼は歴史法学派の信奉者であつたが、刑法法の基礎づけではヘーゲルに従つた。

(10) ヴァルター(F. Walter)(Wa)——断片的に伝えられた八九枚の筆記録。行間狭くびっしり書かれた清書稿。欄外にしばしば重要なキーワードが書かれている。「世界史の地理的基礎」のアフリカの項から始まり、ローマ史の途中(平民と貴族との対決)で終わっていて、不完全である。エールトマンの同一年度の筆記録に部分的に依拠していることが確かめられたが、それ以外の素材もある。ヴァルターはこの学期の一年後にベルリンに着いたため、数名の級友のノートを集めて、この筆記録を合成した。

(11) 筆記者不明(Anr)——三七四頁におよびわめて入念に仕上げられた清書稿。表題は大きな装飾的な文字で書かれている。筆記者も所有者も不明である。

(12) シュティーヴ(Friedrich Stieve)(St)——ベルリン州立プロイセン文化財図書館蔵(請求番号 MS. GERM. QU. 1320)。一一一枚二九頁の清書稿。ツィーシェのカタログに載っている抜粋(Z. 283-285)を見ると、自己流の略字が多く使われているのが分かる。講義のすべての範囲を記録してはいない(Hof. 276)。シュティーヴはプロイセン文部省の樞密顧問官。ホフマイスター版に一部が収録されている(Hof. 258-278)。

(13) ガルチンスキー(Stefan Garczynski)(Ga)——ベルリン州立プロイセン文化財図書館蔵(請求番号 HDSCHR. 236)。書き間違いがほとんどなく、欄外もほとんどない清書稿。一八五枚三七〇頁。最後に「ベルリン 一八二七年三月三十日」と記されている。ステファン・ガルチンスキー(1805-1833)はポーランドの詩人で二十八歳の若さで亡くなっている。ツィーシェのカタログに抜粋が載っている(Z. 287-289)。一九八四年秋ロンドンのオークションで同図書館が入手。

一八二八／二九年の筆記録は一つも発見されていない。

一八三〇／三一年

(14) カール・ヘーゲル(Karl Hegel)(KH)——ヘーゲル・アルヒーフ蔵。五〇九頁に及ぶ詳細な清書稿。最初の頁に表題「父の講義に基づく世界史の哲学F・W・K・ヘーゲル(一八三〇—一八三二年冬学期)」があり、それに目次が続く。現存する筆記録のなかで最終学期の講義を最も詳細に伝える資料と思われる。これとカール版とを比較すれば、彼の編集の実態も浮かび上がってくるはずである。マールブルクのアスバッハが編集し公刊の予定。ペゲラーのトランスクリプトもある。

(15) アーカスダイク(Jan Ackersdijk)(Ac)——オランダのユトレヒト大学図書館蔵。四九三頁の清書稿。アーカスダイク(1790-1861)は博識な法律家W・C・アーカスダイクの息子としてオランダのセルトーヘンボスに生まれる。父の影響で神学や哲学、古典文芸、芸術を愛好するようになり、一八〇七—一〇年にユトレヒト大学で法学を学ぶ。ここで、当時高名であった二人の教授の講義、すなわちPh・W・ファン・ヘースデンによる「プラトン哲学」講義と「哲学的歴史」講義、C・W・デ・ルールによる「国際法」講義を受講した。卒業後は弁護士として、後には検事として裁判所で働き、さらにユトレヒト大学理事団の書記を務めた。彼の研究熱意は人目を引き、一八二五年にはリエージュ大学の教授に任命され、経済学を講じた。一八三〇年にベルギー革命が勃発し、ベルギー王国が独立すると、リエージュ大学にいらなくなり、その後ユトレヒト大学の教授に任命される。ここで彼は統計学、経済学、中世・近世史などを講じた。先任教授の死去に伴

う授業分野の調整によって、一八四八年以降やっと、自分が特に好んだテーマである経済思想について力を注ぐことができるようになった。彼は一八三〇年十二月十八日から一八三一年四月三十日までベルリンに滞在しヘーゲルの講義をほとんど欠かさず聴講した。この筆記録は彼が要約的にまとめた自分の筆記録を専門の筆耕に清書させたものである。<sup>(1)</sup>

(16) ヴィーヒェルン(Johann Hinrich Wichern)(Wi)——二二二頁の清書稿。若干の書き間違いを含む。欄外に追補と若干の見出しがついている。数人の共同作業による。

(17) ベーク(Gustav Boeckh)(Bo)——ベルリン州立プロイセン文化財図書館蔵(請求番号HDSCHR. 354)。非常に急いで書かれた六二枚の速記録で、多くの略字を含む。ヘーゲル自筆の草稿と内容的に対応する。ローマの章で中断している。しばしば欄外に追記がある。グスタフ・ベーク(1810-1871)は古代文献学者アウグスト・ベークの三人息子の長男。一八二九年夏学期からベルリン大学に学生登録した。この筆記録は子孫の所有であったが、一九九一年にプロイセン文化財図書館に移管された。ツィーシエのカタログに抜粋が載っている(Z. 304-309)。イエシュケがヘーゲルの草稿を編集する際、この速記録に照らして草稿の配列を決定している(GW. 382 ff.)。

(18) 筆者不明(An 2)——四七頁の断片。ペルシア帝国についての講述の終わり頃から始まり、アウグスト大帝の叙述で終わる。全体としてあまり詳しくない。

(19) ハイマン(Heimann)(He)——プタペスト図書館蔵。ガンスが初版編集に用いたとして編者序文で挙げていた筆記

録。その後、行方不明になっていたが、ごく最近ブタペストで再発見された。現在これを編集しているフィーヴェック（イエーナ大学講師）によれば、省略が多くきわめて読みにくいとのことである。最後の二講義分が欠けている。速記録に後から手が入れられており、すでにハイマンの解釈が入り込んでいる。ハイマンの強調点は、人間が歴史に翻弄される操り人形ではなく、「自己目的をもった人間個人」であるという点にあった。

（引用略号）引用は次の略号で指示する。

Br.（書簡集）*Briefe von und an Hegel*. Hrsg. von J. Hoffmeister. Hamburg 1969-1981.

GW.（全集版）G.W.F. Hegel, *Gesammelte Werke*. Bd.18. Hrsg. von W. Jaeschke. Hamburg 1995.

Hof.（ホフマイスター版）G.W.F. Hegel, *Die Vernunft in der Geschichte*. Hrsg. von J. Hoffmeister. Hamburg 1955.

K.（カール版）G.W.F. Hegel, *Vorlesungen über die Philosophie der Weltgeschichte*. Hrsg. von E. Gans u. K. Hegel.

2. Auflage. Berlin 1840（Nachdruck Stuttgart 1928）. 武市健人訳『改訳 歴史哲学』上、下巻 岩波書店 一九六八～九九年。

LI.（リッピン版第1分冊）*Sämtliche Werke*. Bd.8. Hrsg. von G. Lasson. Leipzig 1920.

LII.（リッピン版第2分冊）*Sämtliche Werke*. Bd.9. Hrsg. von G. Lasson. Leipzig 1923.

Z.（ベルリンのブロイセン文化財図書館所蔵のヘーゲルの遺稿および講義録のカタロ）*Der handschriftliche Nachlass G.*

*W.F. Hegels und die Hegel-Bestände der Staatsbibliothek zu Berlin-Preussischer Kulturbesitz*. Teil 1. Katalog. beschrieben von Eva Ziesche. Harrassowitz Verlag. 1995.

## 注

(1) これについては別稿「山崎純」ヘーゲルと歴史的現在——未公開講義録と最新のテクストをふまえて『文化と哲学』第14号、静岡大学哲学会、一九九七年）で検討した。これの九頁に「世界史の哲学」講義に関する資料と公刊されたテクストの一覧を掲げたので参照して頂きたい。

(2) F. Hespe, Hegels Vorlesungen zur "Philosophie der Weltgeschichte", in *Hegel-Studien*. Bd.26. 1991. S.78-87. へこれにもとづく山口誠二氏の「ヘルリン期末公開講義筆記録管見——ヘルリン版全集の呪縛からの解放」『ヘーゲル哲学研究』創刊号）参照。

(3) このシンポジウムについては注(1)の拙論で概要を報告した。

(4) *Handschriften en Oude Drukken van de Utrechtse Universiteitsbibliotheek*. Utrecht 1984. S.285-287. へのオランダ語の文献を翻訳して下さった川口博静岡大学名誉教授に感謝申し上げます。